

合山林太郎『幕末・明治期における日本漢詩文の研究』

(二〇一四年 和泉書院)

新 稲 法 子

漢文学を専攻する者が多いことは大阪大学の日本文学研究室の特色の一つとあってよいだろう。王朝時代の詩文から禅林の文学、そして「江戸漢詩」と、各時代の研究分野に卒業生がいる。しかし、もし卒業生だけで日本の漢文学史を紡ぐとしたならば、明治以降の漢詩文を専門とする者がいなかった。

合山林太郎氏の研究は、その空白を埋めるものである。和泉書院から出版された『幕末・明治期における日本漢詩文の研究』により、氏のこれまでの研究の全貌をうかがうことができる。

第一部から第四部にわたる十七本の論文は一部を除き既発表のものであるが、本書書き下ろしの序章によって、合山氏の研究の目指すところがよりはっきり示されている。すなわち氏の研究は、脈々と受け継がれてきた漢詩文という伝統が、天保末年から明治三〇年代という時代にどのように変化していったかを縦糸としている。そして西洋文明の流入や俳句や和歌の革新といった同時代の動きと漢詩文の関係を、時に詩壇を超えた交友関係まで視野に入れながら横糸としているものなのである。著者の研究は、常にこの「縦」と「横」が意識されているように思われる。

本書はこの序章に続く全四部と資料『漁洋山人精華録訓纂』への森槐南自筆書き入れから成る。以下、全四部の内容を簡単に紹介しよう。

第一部「幕末・明治期の社会と漢詩文文化」には、横の広がりを中心に置いた論考が集められている。

第一章「漢文による歴史人物批評——幕末昌平賢関係者の作品を中心に——」は、幕末に流行した詩論がどのようなものであったのかを考察し、詩論が時代の思潮に与えた影響にまで説き及んだものである。

第二章「明治初期の漢詩と結社——旧雨社をめぐって——」は、明治初期最大の文人結社旧雨社の実態を資料を用いて明らかにし、従来の懐古的な集団というイメージを一新するものである。

第三章「青少年期の森鷗外と近世日本漢文学」は、鷗外が閲読した近世後期から明治にかけての漢文学について調査したもので、具体的な書名を示し享受の仕方を考察している。

第四章「漢詩改良論——詩歌の近代化と漢詩——」は、明治十年代から二十年代の「漢詩改良論」について検討したものである。西洋の詩の影響、訓読の再検討、平仄や韻の廃止といった文学の問題だけではなく、同時代のナシヨナリズムという思想に至るまで、本章で示された問題は優に一冊になるような広がりを持っている。近代詩歌史の側から見た漢詩ではなく、漢詩の側からのこ

ういった論考は貴重である。

第五章 「明治期の時事批評漢詩——国分青厓「評林」と野口寧斎「韻語陽秋」——」にいう「時事批評漢詩」とは、「政治や社会の事件や文芸作品などといった、明治期の時事を詠詩の対象とし、新聞や雑誌に専用の欄が設けられ、連載された一種の変体の漢詩」(69頁)である。この章は、明治二十年以降、人気を博した時事批評漢詩について、国分青厓と野口寧斎の二大連載を取り上げて考察したものである。

これを受けて第六章 『しがらみ草紙』の「詩月旦」——森鷗外と文壇批評漢詩——では、鷗外ら新声社が刊行した『しがらみ草紙』の文壇批評コーナーに、時事批評漢詩の影響が見られることを指摘している。

第二部 「幕末・明治初期における漢詩の潮流と漢詩壇の動向」は、「縦」の繋がりに重点を置いた論考が編まれている。各章の内容は次のようなものである。

第一章 「性靈論以降の漢詩世界——近世後期の日本漢詩をどう捉えるか——」は、単純にとらえがちな近世後期の性靈論受容について、具体例を挙げながら再検討を加えたものである。

第二章 「幕末京坂の漢詩壇——広瀬旭荘・柴秋村・河野鉄兜——」は、表題の三人の詩人の詩風詩論を考察し、江戸に偏りがちな幕末の漢詩壇研究の中で、江戸に劣らず活発であった京坂の幕

3

末の詩壇の動向を明らかにしたものである。

第三章 「幕末・明治初期の遊仙詩——森春濤とその周辺——」は、幕末・明治初期の詩壇に流行した神仙世界を題材とする遊仙詩について、森春濤を中心に考察したものである。

第四章 「幕末・明治初期の詠物詩——大沼枕山一派の詩風をめぐって——」は、詠物詩という切り口で幕末・明治期の詩壇を捉えたもので、その考察は枕山一派のみならず植村蘆洲や森春濤・槐南にまで及んでいる。

第三部 「森槐南と新世代の漢詩人たち」は、明治期を代表する詩人、森春濤とその子槐南についての論考を集めたものである。

第一章 「幕末・明治初期の艶体詩——森春濤・槐南一派の詩風をめぐって——」は、春濤一派の艶体詩について、その特徴を考察し、艶体詩の流行が漢詩文以外にも影響を及ぼしたことを述べている。

第二章 「漢詩における明治調——森槐南と国分青厓——」は、森春濤以降の重要な詩人、森槐南と国分青厓の作品をとりあげ、異なった詩風の両者に共通する明治調ともいえる特徴を指摘し、正岡子規など他ジャンルの詩歌革新に与えた影響にも触れている。

第三章 「森槐南の読書歴——青少年期を中心に——」は、本書書き下ろしの論考で、森槐南旧蔵漢籍に見られる書き入れを詳細

4

に調査することにより、若年期の読書状況やその関心を明らかにしたものである。

なお、王漁洋に関する書き入れは資料『漁洋山人精華録訓纂』への森槐南書入れに翻刻されている。

第四章「森槐南と呉汝綸——明治三〇年代における日中漢詩唱和——」は、明治三〇年代という複雑な国際状況の中で日本人と清の文人との漢詩唱和がどのように変化していったのかを分析したものである。

第四部「野口寧齋の生涯と文学」は、明治期の漢詩文研究に於いて重要であるにも関わらず先行研究に乏しかった野口寧齋についての論考を集めたものである。

第一章「野口家一族と幕末の文人社会——寧齋の祖父良陽・父松陽について——」は書き下ろしである。主に中村幸彦文庫蔵の野口家関係資料を用いて祖父良陽・父松陽の事跡をたどり、寧齋のルーツを明らかにするものである。

第二章「野口寧齋の前半生」は、父松陽と森春濤の交流から森槐南に指導を受けることとなった寧齋が、のちに詩壇の中心人物になるまでをその詩風詩論も含めてたどる。同時に、日巖谷小波ら硯友社との繋がりや『舞姫』論叢をもとりあげつつ、小説批評家としての寧齋の事跡と小説観を説いている。

第三章「野口寧齋の後半生」は、前章を受けて寧齋の後半生を

追ったものである。詩壇活性化のための貢献や日清戦争に果たした役割、寧齋の患っていた重い病についてなど、その交友関係にも注目しつつ説いている。

以上紹介した合山氏の論考を支えているのは、これまで注目されることのなかった多くの新資料である。これらを用いて着実な論考を積み重ねた本書は、幕末・明治期の文学を志す者だけでなく、他の時代の日本漢詩を専攻する者にとっても必読の書であるといえよう。

天保末から明治三〇年代は、印刷技術の向上や教育の普及などもあり、漢詩文が隆盛を誇った時期であったが、同時に漢詩文が日本語の中で生き残っていくかどうかを決定する重要な変化の時期でもあった。結果的に漢詩文は時代に適応することができず、その巨大な遺跡を日本語の中に残すことになるのである。

王朝時代から近世まで、およそ日本の漢詩文を専攻する者は、専攻する時代の枠に留まらず、近代に於いて漢詩文がその輝きを失っていく様を見届けなくてはならない。なぜなら私たち日本文学の研究者は、自らの専門分野が現在の生きた日本語の中でどのような意味を持っているかについて、常に自覚的であらねばならないからだ。日本人が漢詩文の何を受け継ぎ何を捨てたのかを最もはつきりと知ることができるのが、幕末・明治期の漢詩文研究なのである。